



写真3 ポスター発表会場



写真4 ニースの海岸

スペシャルゲストとして招かれ、セルロースやその誘導体に関する講演が行われた。その他にも、4件のプレナリー講演、14件の基調講演、8件の招待講演をはじめ、236件の口頭発表、201件のポスター発表が行われ、約450人が参加した。発表内容は、合成、構造、分析、ナノテクノロジー、バイオプラスティック、バイオメディカル、バイオ燃料、紙・パルプ、食糧など多岐に亘っており、多糖類の幅広さを再認識する良い機会となった。特にセルロースに関する発表は非常に多く、セルロースを使ったマテリアル開発への期待が大きく感じられた。近年ではセルロースやデンプンなどの多糖類は、持続可能な再生資源“バイオベーススマテリアル”として注目されており、多糖類に対する注目度が高まっている。

る注目の高さを実感した。

筆者自身は、「Chemo-enzymatic Synthesis of a Novel Inclusion Supramolecular Polymer Composed of Amylose and Poly(L-lactide)」のタイトルで、アミロースとバイオベースポリマーであるポリ乳酸を化学-酵素的手法によって融合した新奇な超分子ポリマーの合成について発表した。本会議ではマイナーな内容かと思われたが、今後の研究展開において有意義なディスカッションをすることができた。

最後に、本国際会議参加にあたり渡航費を援助いただきました公益財団法人農芸化学研究奨励会に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

17th International Congress of Comparative Endocrinology（第17回国際比較内分泌学会）に参加して

国立循環器病研究センター 永井千晶

私は、スペインのバルセロナ市内にあるバルセロナ大学生物学部において、2013年7月15日から19日にかけて開催された17th International Congress of Comparative Endocrinology（第17回国際比較内分泌学会）に参加した。IFCES（International Federation of Comparative Endocrinological Societies）が主催する本学会は、様々な動物種における内分泌機構の多様性と普遍性の理解をテーマとし、4年に1度、世界各国の内分泌学研究者が一堂に会する、歴史のある学会である。本学会では、6演題の基調講演のほか、State-of-the-ArtおよびOral communicationを含む18のシンポジウム、48演題の口頭発表、175演題のポスター発表、および7つのワークショップが行われた。ヨーロッパでの開催ということでEU圏各国からの参加者

が多かったが、国別でみるとスペインの次に日本からの参加者が多く、本分野における日本人研究者の貢献度の大きさを感じた。

今年ポスドク2年目にあたり、本学会では、博士課程在籍時の仕事について「Competitive binding of ion transport peptide-like (ITPL) and tachykinins to *Bombyx neuropetide G protein-coupled receptor (BNGR)-A24」*という演題でポスター発表を行った。また、現職の仕事について「Dynamic changes in beta-2-microglobulin and natriuretic peptide family peptides during the progression of heart failure in Dahl salt-sensitive rats」という演題で口頭発表を行った。ポスター発表では、カイコの甲殻類血糖上昇ホルモン(CHH)族ペプチドであるITPおよびITPLの受容体として我々が同定したオーファンGタンパク質共役型受容体のうち、BNGR-A24について、タキキニン関連ペプチドに対する受容体としての機能解析の結果を報告した。ポスターの公開期間は会期中2日間のみであったが、配布用のポスター縮小版が早々になくなってしまったこと、



写真1 学会会場にて。



写真2 バンケットにて。
(右:L.Schoofs先生)



写真4 バルセロナ市内にて。
(サグラダ・ファミリア)



写真3 エクスカーションにて。
(モンセラット)

ポスターセッション以外でも訊きに来てくださる方が多かったことから、反響はますますであったと感じている。また、口頭発表の方も、セッションのスケジュールが大幅に遅れており質疑応答の時間が削られてしまったことは残念であったが、自身の研究内容と考えを十分にアピールできたと思う。

学会での発表内容は、脊椎動物および無脊椎動物の様々な種を対象とし、ホルモンの細胞内シグナル伝達経路から動物の行動まで多岐に渡っていた。これまでにクルマエビ（甲殻類）、カイコ（昆虫）、ラット（哺乳類）と実験対象を変えてきた私にとって、今後の研究活動の方針を考える上で興味深い演題が多かった。全体としては魚類や無頸類を対象とした演題が比較的多く、自身の研究範囲と近い研

究者が期待より少なかったことは残念であったが、その分、思いがけない意見やアドバイスが頂けたことは収穫であった。

会期中には、休憩やランチのほか、エクスカーション、バンケットなど、交流の場が多く設けられており、多くの著名な先生方や若手研究者と情報交換・交流することができた。学会に参加して毎回感じることではあるが、面白い研究をしている方はバイタリティーに溢れ人間的にも魅力的な方が多く、本学会においても年齢・国内外を問わずそのような方々と出会い、多大な刺激を受けた。

最後になりましたが、本学会への参加にあたりご支援いただきました、公益財団法人農芸化学研究奨励会に厚く御礼申し上げます。